



麦づくり情報(No.4)

◎農試作況試験における麦類の生育(3月19日調査)

品種	播種期 (月/日)	年次	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉齢 (L)	葉色 (SPAD)	概況 (平年・平均と比較して)
シロガネコムギ	11/20	本年	62.1	613	9.1	41.6	[気象] 3月1日~3月18日まで ◆平均気温…平年より0.2℃高い ◆日照時間…長い(平年比131%) ◆降水量…少ない(平年比72%) [生育] ◆草丈 12/8播種「シロガネコムギ」(以下、○/○シロガネコムギと略表記。他品種についても同様の略表示)及び12/1・12/8はるか二条は高い。11/20シロガネコムギ及び12/8サチホゴールドはやや高い。12/1サチホゴールドはやや低い。 ◆茎数 12/8サチホゴールド及び12/8はるか二条はやや多い。12/1はるか二条はやや少ない。11/20・12/8シロガネコムギ及び12/1サチホゴールドは少ない。 ◆葉齢 シロガネコムギ及びはるか二条の葉の展開はやや進んでいる。サチホゴールドの展開は平年並み。 ◆葉色(SPAD値) 12/1はるか二条はやや高い。12/8シロガネコムギと12/1サチホゴールド及び12/8はるか二条はやや低い。12/8サチホゴールドは低い。 ◆生育ステージ(次頁参照) 11/20シロガネコムギは出穂始となっている。大麦については止葉抽出展開中である。
		平年	61.1	676	8.9	44.7	
		平年比(差)	102	91	+0.2	-3.1	
	12/8	本年	56.4	674	8.2	45.8	
		平年	46.0	688	8.0	46.8	
		平年比(差)	123	94	+0.2	-1.0	
サチホゴールド	12/1	本年	60.5	959	10.1	38.1	
		3ヵ年平均	62.1	1059	10.1	40.0	
		前年比(差)	98	91	±0	-1.9	
	12/8	本年	55.2	1082	9.0	35.2	
		平年	52.7	1035	8.9	41.4	
		平年比(差)	105	105	+0.1	-6.2	
はるか二条	12/1	本年	65.8	920	10.2	43.9	
		3ヵ年平均	58.7	952	9.9	42.7	
		前年比(差)	112	97	+0.3	+1.2	
	12/8	本年	59.9	904	9.2	42.6	
		6ヵ年平均	54.7	888	9.0	43.4	
		平年比(差)	110	102	+0.2	-0.8	

生育概況

- ・11月中下旬に播種された小麦は、穂孕み期～出穂始めとなっている。
生育は良好で、平年より生育は進んでいる。
- ・11月下旬に播種された大麦では、穂孕み期～出穂始め、12月上旬播種の大麦は穂孕み期を迎えている。
生育は良好で、平年より生育は進んでいる。
- ・2月の降水量が多かった影響で、肥料の流亡や湿害等により葉色が薄い圃場が多く見受けられる。

・今年の出穂期は、平年に比べてかなり前進化すると予想される(以下、出穂期予測を参考)。

※今後の気温によって、出穂期は大きく変動するので、あくまで参考値としてください！

〈農研機構:リアルタイムアメダスを用いた麦の発育ステージ予測(3月21日時点)〉

○シロガネコムギ

11/20 播種:3月24日(平年比-12日)、12/1 播種:3月31日(平年比-10日)

○チクゴイズミ

11/20 播種:3月25日(平年比-12日)、12/1 播種:出穂期 4月1日(平年比-9日)

〈佐賀農試:出穂期推定プログラム(3月21日時点、以降の気温は平年値で試算)〉

○はる風ふわり

11/20 播種: 出穂期 3月23日

○はるか二条

11/25 播種: 出穂期 3月23日、12/10 播種: 出穂期 3月31日

2. 今後の管理

1) 施肥

今年は、1月下旬以降の降水量が多いため、肥料の流亡により、収量及びタンパク質含有率の低下が懸念されることから、穂揃期追肥(実肥)を確実に施用する。

(1) 穂揃期追肥

近年、麦の品質ランクにおいて小麦・大麦とも低タンパク傾向が指摘され、実需からは改善が求められている。タンパクの向上に直結する穂揃期追肥は必ず施用する。特に、パン用小麦は、倒伏しそうでも必ず施用する。本年の出穂期は平年に比べてかなり前進化すると予想されるため、遅れないように下表を参考に散布する。

葉色の褪め方にかかわらず必ず施用

品 種	窒素量 kg/10a	実肥の施用量(/10a)
パン用 はる風ふわり	5	硫安 25kg または 尿素 12.5kg
パン用 さちかおり	7	硫安 30kg または 尿素 15kg
めん用 チクゴイズミ	3	硫安 15kg または 尿素 7.5kg

葉色が薄い場合(出穂期前頃の SPAD 値 40 以下)施用

品 種	窒素量 kg/10a	実肥の施用量(/10a)
シロガネコムギ	2	硫安 10kg または 尿素5kg
大麦	2	硫安 10kg または 尿素5kg

★穂揃期追肥は、出穂期の3日後が効果的。それ以降に施用する場合は増量が必要となる。

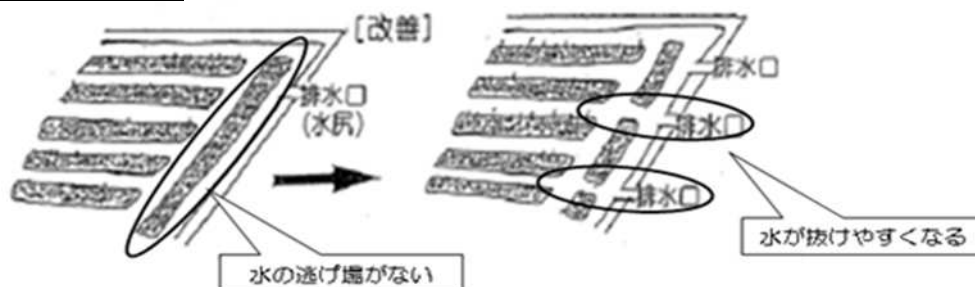
※ 出穂期 : 圃場内の4~5割の穂が出た頃

<液肥利用の留意点>

- ・肥料を溶かす際は、直接タンクに入れると溶けない場合があるため、事前にお湯等で溶かし、タンクに入れると濃度ムラがなくなる。 ※硫酸による液肥施用は難しいため、液肥利用の際は尿素を用いる。
- ・乗用管理機での施用の場合、赤かび病防除との同時施用も可能。ただし施用時期が遅くなるため、3～4割追加した量が必要になる。
- ・液肥施用後、芒や葉先などに肥料焼けがみられるが、収量や品質への影響は小さい。

2)排水対策

今後、降雨量が増えることが予測される。湿害により根の生育が抑制され、登熟に影響するため、排水溝を再整備するなど排水強化を行う。



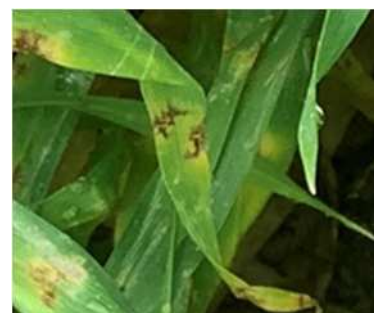
3)病害虫防除

網斑病・赤かび病は予防が基本となる。本年の出穂期は、平年に比べてかなり前進化すると予想されるため、時期を逸さないよう準備・対策を講じておく。

(1)オオムギ網斑病

3月1～4日に農業技術防除センターが行った調査(22圃場)では、平均発生茎率は5.8%で、平年(同2.6%)よりやや多い。

防除適期は出穂期～穂揃期で、この時期の防除効果が最も高い。しかし、早い時期から発生株が散見され、病斑が上位葉に進展しているような場合は、直ちに防除を行うとともに、出穂期～穂揃期にも防除を実施する。



オオムギ網斑病

網斑病の防除適期

麦種	全茎数の40～50%が出穂した日	出穂期	穂揃期	全茎数の80%が出穂した日(出穂期から概ね2～3日後)		
		0	+5日	+10日	+15日	+20日
大麦	←————→					

注1) 出穂期とは全茎数の40～50%が出穂、穂揃期とは全茎数の80%が出穂した日。

注2) 矢印は防除適期を示し、薬剤については次表を参照とする。

注3) 出穂期より早い時期から発生株が散見され、病斑が上位葉に進展している場合は、この時期にも防除を実施する。

※ チルト乳剤は1回しか使用できないので注意する。

農薬名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量(/10a)	使用時期	総使用回数	使用方法
チルト乳剤25	網斑病	1000倍	60～150L	収穫21日前まで	1回	散布

(2)赤かび病

他県にて、小麦のカビ毒(DON)の基準値(1.0mg/kg)を超過するものが流通し、商品回収が行われる事故が発生しています(および玄麦の廃棄)。カビ毒に汚染された麦を流通させると、消費者・実需者の信頼を失い、国産麦全体の消費の減少に繋がりがねないため、確実に赤かび病防除を実施する。

- ◎特にパン用小麦(はる風ふわり・ミナミノカオリ・さちかおり)、
大麦(はるか二条・しらゆり二条)については2回防除を徹底する。
・出穂期は、播種時期や圃場条件、今後の気象等によって異なるため、
必ず圃場ごとの生育状況を確認したうえで、適期防除に努める。

① 小麦

- ・1回目: 開花始め～開花期(出穂期の約7～10日後)
*発病抑制だけでなく DON 低減効果が高い。
- ・2回目: 開花10～20日後頃
*より効果が高まる

② 大麦

- ・1回目: 葯殻抽出期(出穂期の約2週間後)。
*発病抑制だけでなく DON 低減効果が高い。
- ・多発生が予想される場合は2回実施(1回目防除7日後)する。

※大麦でトップジンM水和剤を使用する場合は、収穫前30日前までの使用となっているので注意する。



大麦の芒(のげ)の下から
黒い葯殻が出る時期に防除



麦種	予想される赤かび病の発生量	全茎数の40～50%が出穂した日							
		0	+5日	+10日	+15日	+20日	+25日	+30日	
小麦	少～並発生	開花始め～開花期							
	並～多発生			全茎数の80%が出穂した日(出穂期から概ね2～3日後)					
大麦	少～並発生	葯殻抽出期							
	並～多発生								

注1) 出穂期とは全茎数の40～50%が出穂、穂揃期とは全茎数の80%が出穂した日。

注2) 小麦の開花期とは40～50%の穂が開花した日。

注3) 大麦の葯殻抽出期とは、50%以上の穂で葯殻が見え始めた日。

注4) 大麦で2回目の防除を行う場合、薬剤の使用(収穫前日数)に特に注意する。

令和6年産麦類生育期間気象グラフ

アメダス観測値(佐賀)

佐城農業振興センター

